

大村知子\* ○稲見直子\*\* (\*静岡大、\*\*静岡大・院)

【目的】高齢者や障害者は平衡能や手指の巧緻性・筋力・視覚機能などの動作機能が衰えるため、衣服の着脱動作が困難となる。衣服の着装行動の自立は日常生活の自立の基礎となるとともに、精神的自立にも関与すると考えられる。そこで、着脱におけるバリアフリーの衣服デザインについての基礎資料を得ることを目的として、手指の障害と明きの留め具との関係について着衣実験を実施した。

【方法】障害の条件は、両手親指の機能不全とした。被験者は左右の手指に障害を設定した女子学生 12 名で、握力の平均は右 26.9kg、左 25.8kg であった。実験衣は布帛の前あきの長袖・衿付きブラウスで、留め具はボタン（直径 1.3cm、2.0cm）、スナップ、ファスナー、ループホールボタン、マジックテープの 6 種類とした。ボタンは前明きに 5 個、左右のカフスに 1 個ずつとした。ビデオカメラで被験者の前方から動作を撮影し、動作分析をした。着脱の難易性についての官能検査は 4 段階評価で行なった。

【結果】留め具の位置による着脱の難易度は、一番上とカフスの難度が高く、いずれの留め具も脱衣のほうが容易であった。スナップは着衣時と脱衣時との難易差が大きく、マジックテープとファスナーはその差が小さかった。着脱所要時間を最も要したのは、ボタンであった。